

1809
21

正史
實傳いろは文庫卷之二十

江戸

爲永春水著

第三十九回

當下湖平太の懐中より小判三兩取り出し一鼻紙ひざつと包んで「儲て不思議な縁であつてよ」年頃の女童成遂（あ）、是種娘（むすめ）の姿へどきぬまえん親（おやぢ）の言叶うる里見氏の行脚（ゆみやか）成尋ねね今ふ浪（なみ）くしてどきるあらう昔（むかし）のよも死忘れぬうちわづぶ

絶の念力も折れ足りぬをゆゑある。すゝ骨殖
おて世後故せとゆふと云ふがどきのまじりう
まえりを
十石のまみの筋うね毛と毛を糧のあめのどり
及びきよはあそむに力もあります。既て是へ
余りやでかくのほけめ今日の日は變らう
と心ひぐるい支ざしもお會せと云つても纏是支
又まづち實を渠ツてねおさんふも、日よりモテ往
かくのを比薦引をゆくお渡りへまつて纏實

見ゆる御平ちの吉治ふか民を憐りさの年ふと
てく家成改め民へゆく日をマア仰給つてお見をござ
るまき子エぬとあるおさんふか國よりのづひ猿
ときのと一鷹うまでに候かふと仰て下さるといふこれも
大さく候ふもる観音さまの口利益うか翁さんの引合
せうねきやアをうとんる様の支へどきわません候
うるふ大そうふか今まをぞ候ほきまつてお寛み
おもの毒どご年もまじゆう是のマアお過りゆく

まはせヨ私の輕ひいお金をかねもひくものでもあふ
くわ見極みまうきのくさん下さのますと支がむ
ようう有解へどあるまを「イニ親くう首の所縫を
ぞイドヨバ中と麻累よ波モ多考へ波とあら
ああ比方でゆ縫のみ紙被是と書けく是る
まこと仰かねが身の毒を縫ごふとくむは是
の納めてト遠氣も手縫よ」と 湖「主縫
のい船宿をゆうの割縫が重うハツとまく今具

お帳ふるまきうきうかぬ人えんがお済んみま
たうねぐゆつゆゆ細紙要くくぬ」てお是んす
まうト云あらうもんとまるゆぞ民「まアも渡か得
うまのキ」雨ハ止まく「これひの通ゲコマう
ござるまもくうあのお履物でひくやうまくま
まく私の大ち女をうでち岱ひうもすうおねぐどきみ
まんそれどもお向への内うれ何でもござるまく
ち渡備てまうまもくト立出う紙急小一

とあ 一ニサキ法の変もあるまへる 余所成得
うち行うお記を従ふるも及ばず隨ち能く
従ふるの變をさへサ 民ノイエく更にあり内是づ汚
甚くひらきとせかせんとトキ人とき門に乃
障子張明て中間仲の男 男ノモシ梅幸の民さん
と此方でござむまもうト云ひあらず美小湖平
おの居す城ふつけ 男ノイヤ目形さま遠西より至
みよくまく貴君のお在きたゞ知りませんと

方々とお尋ねひへりきる 一市内うちを養ふと宣
支でも遠所は居ひれども 一市内一个先刻大
管役人より紙を持そ年れとよりてまづか屋
處へ立候りまゝ處が大管役へお遠ひゆへお至
先まで參りまゝこのをあらみ金圓二千五
千 貴公がお待ひてあらうとぞんとまづや
急りてあらましに途中で雨が降りゆ
うちお出入りの刀庭へ参りまゝて兩奥を帰り更

観音の本堂あひ従ひまづく入ッすすみ
おほきまづか堂の圓城一通と尋ねまへてゆ
御見まをもそ圓城を聞まされば最希途中
で空曉の格あがう貴公ふか仰りよすす
み仰でござるまをも種委く業とゆう生
む直ば極かとの人榮店出るか民さんとく狼臺灣
度五か連りよどとの人度をとるまをも要山
中を尋ねまでも那太障臺灣と榮店とら門くへ

一物もござるまをも支支那門くと尋ねまへてゆ
け裏裏とのへ更更圓出まへ「支を別」
大強大強であれ此身もんざ痴漢痴漢ふ出金出金て迷
惑惑くふ墜墜りぬまく大死大死みは家家世世
みた月月候候簡朴簡朴あまえち人の身身入入と接接くあ
いも批判批判をまろのざう屋屋へ序序つても空曉の支
素素こう此家此家み立立あつて變變るぞぞあぞあぞ浦浦を絞絞
あぞあぞ「イ支支へ宣宣くそろ済済て居居ります」
「支支」



どかー もちぬうちふ急りで ほる更と波^ス
え
アヤヌトやア がよでむ ちゆうで どきのまくまく草^ギ
まくと
あく皮^チ ちゆうへうちトまくまくせば 濱平太^{ヒタケ}の市^シ
まく
國^カくまくやあ言つても 無^{ムカ}と眼^メで 知^ルせ撲^ハ打^タま
むをひく お母^{アマ}んで 流波^{リウハ}をぞ出^ハひけり

却てのち酒あり。わくひゆへ安と成運び
まことに。其のを對面う。魏の言葉を元不せドと
き。小姓が金浪を食力。お子が

とくに彩り成のまごとさる間小塩谷家ふ
猪勢都^{きの}判官切腹と聞よすも忠義元
二の湖^こ舟太されば歸て大屋ま一味る一讐
射と心残^のめりうち親妻ふをも覺過
らずとある摯羽の風よ深く愧て薄倖ふ
彌^ミトたるお民親^{おみちか}ふが怨もんとひうづる
も青絛^{せいじやく}波せどお民のい家の藏亡を人内略
ふ國よりも良史の身代^み人勤^ききく今^ハ

後りの間やう聲に青筋の動くとかあるば
往くもみゆを殺さばせを去り物と月日を
送るみぞ湖平太とう惠まよへ金も大ききひ
切りつみ強ハグ飛昇船か一の船底も機取
られよく變者も暮りき

○這面の物語の第六編お著りたは支の
前後あるみよう看官旅ひめうんが是等の例
ハ筆極るれども推しゆべー湖平太か

民が身のまことに是より下少繋り出せよと
初め死をし命をす前後の貢尾を見ゆらし

○か物ナキも多度に殺多

朝鮮

牛

肉

丸

十

包

入

百

銅

戶

下

各

味

線

は筆も人間の根がたの腰の腰と臍の臍を補ひ
備の病を治して虚きが強く一歩立ても壯んま
ま神也えおろすぞ累りて筆は 作者敬白

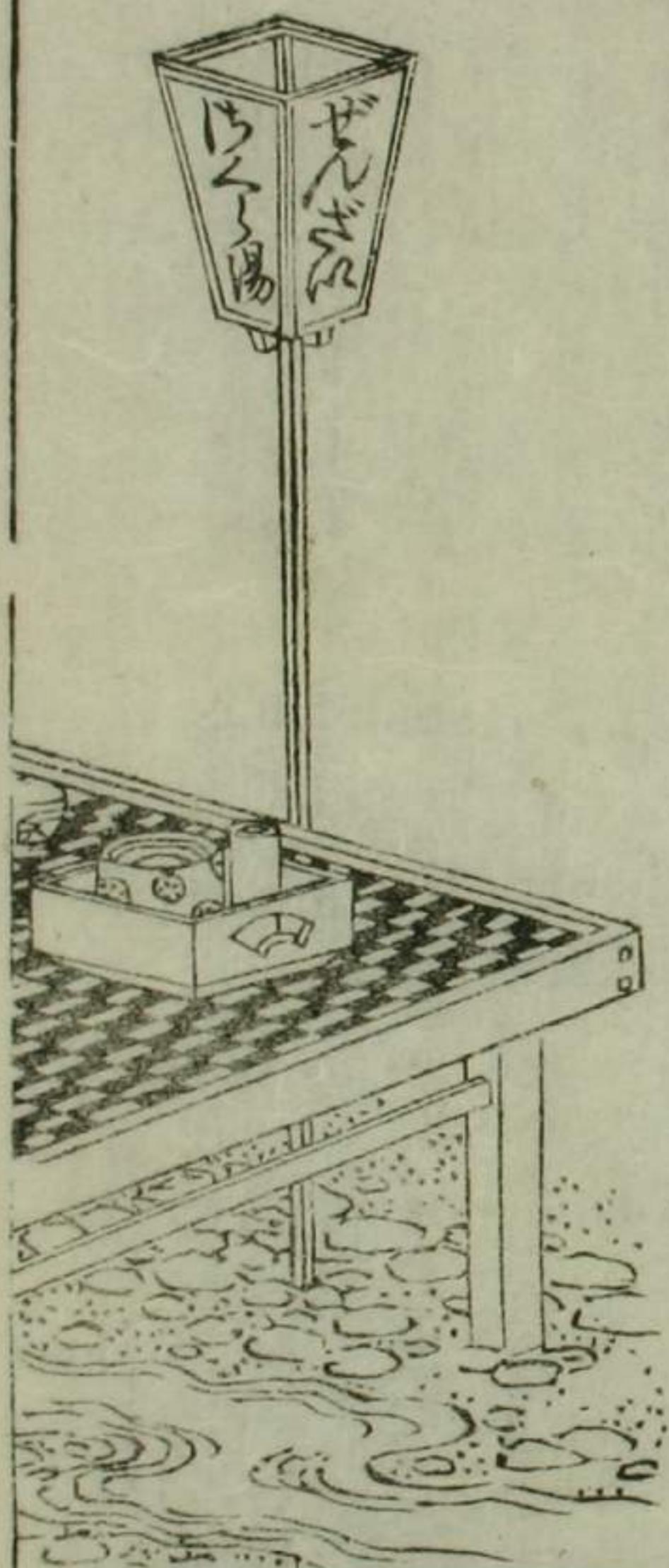
第四回

猪も森湖平太へ七君の讐言を報せんと大里と
假興ふ本國赤堀城主退りて京師六条の片辺ふ
出立す家城築り求め姑く這所は假經として譲答の
所と成寝入程小由良之助へ縁舎す洛中へ入れて
そ。上総友家の同者の有ふ密謀成格られト之
様と身持成壁強みよ。祇園酒屋へ至ふ及ば
走或ひ墨澤権左衛門を也。聞キ花街と酒呑木

支寄せ放乞おまそ嘔方者の名底取り一づ尚是
うそも抱景とて其比放言故の如形みて瀬川竹
の様。之と吸う者を大星源く罷毛と那が馬の事
知成れ。一月後よ放博縁場主モ一味連刺の輩も
初めの種を敵方み由斯をます牛鳴と申す邊
みそす。益一づ中く當時の名跡酒讐の変えど
恩ひ忘れ。一あくまみされば最難うと云ふかの
如絶痛もその中ふ湖平太と大星と列て恩義を

走る者や々車を掣立済りせ一日由遠く亡
君の心晴らと晴さんゆのと人を折を見合せ
喜び落葉にて糠むれども大星を何時とくもを
吹風と耳すも扇ひて只現あきわうさまふ御平お
ゆ力及ばずと止むべき變あらねば猶り傍ぐ
恩按を破まふ今大星が瀬を抜まふ瀬門竹をと
う入俳優且那えあらば大星が不珍跡かや
きき盡さんま御深々とお全發達す所を伏せせん

不復きく由讐討のまゐらうあらわの牧童今宵
もうちよ木屋町の例の二階へ大星が竹を垂ては
必定経來の道ちに像山奈ぬり成幼然せう、支ト
夜又会せて湖平太い日の若さ成ぞ遂居る



名ふ肉えゝるに條の喰累納海の頃も取り口子て
河原ふ殿の茶店挂け成ひ候是居辻津御
ちびく酒湯あひだす。鱈の骨切り字活丸の蒲焼
鬻々廓など軒並引ねて縱つゝ唄女娼妓を
引連てざきく一群あるとまじ向日樹の下めさ連
理の推おの河原の蟹問屋の裏ま張持よ奉事實小
洛中の金錢へ遠所はあら候と詠えまてふ因紙残
年あつたる折一中茶店へ寄り来る二個 一モシナア

若哉一宿づか景んふ宣す其うにてヤ
腰頭娘子のあきらめあひとあひ 美人一ハイウルまほしして
氣概あるきをかねふ供あつみ小ちも
とあらすじのう トキ一ちまえさんやドやサ莫太長旅
てトモダ今肩へいのうか樂しみをもあるとよこのちくぢ
めエモウカ浦ドヤラねやまのちあせんびあやや
せんぐるい希んと初う久情今よりのと家門で
てツまく翁が翁トゆき母父さんうあましよとぞう
きみてトやまの松やまうわく痛んでるんの

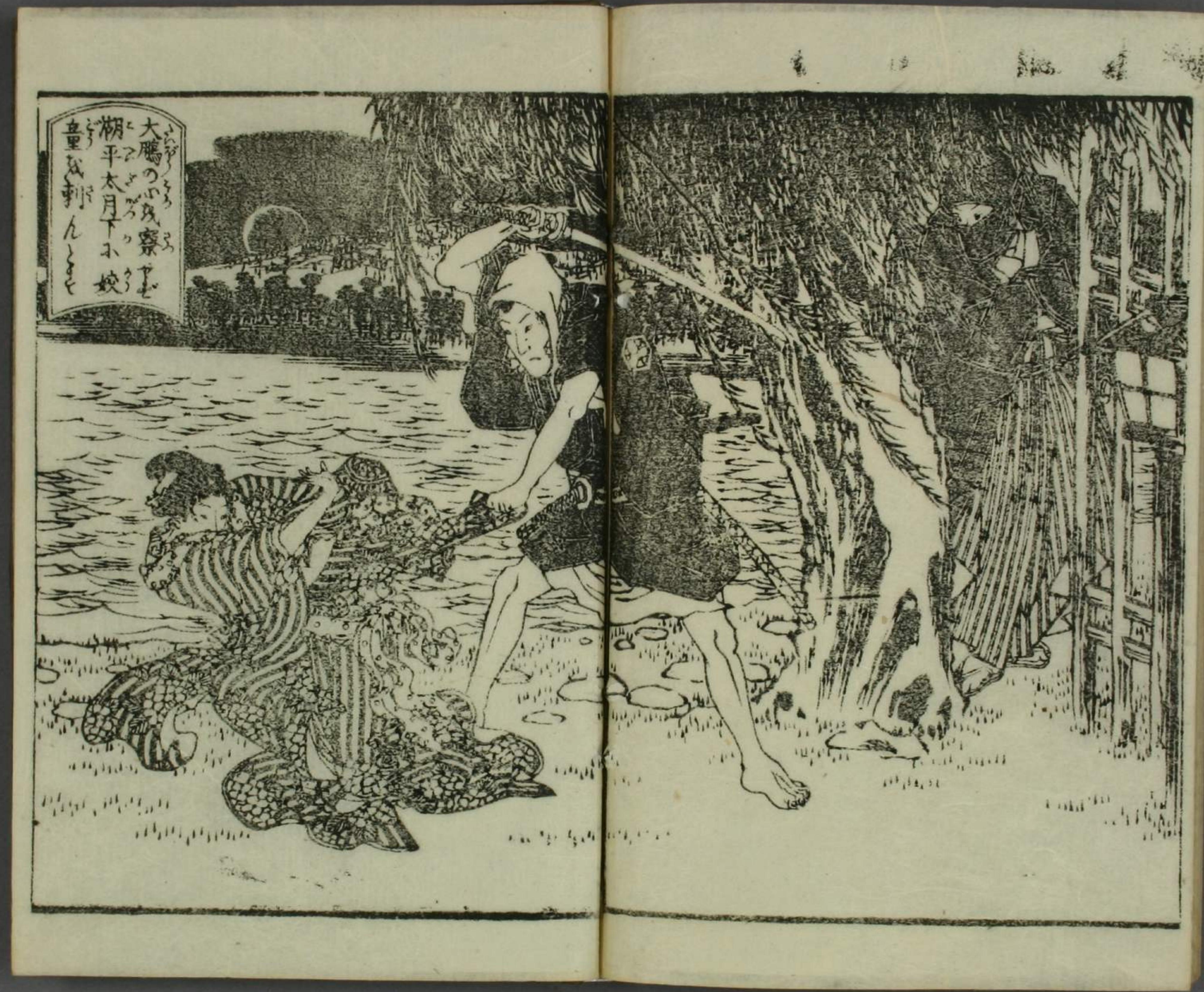
支ふちのんへゆきらへせよゆゆ後安第揚原の
書はうむりの娘やうの娘やさんとくと引合ひてゆる

されと娘や娘や娘や娘やあきう徳二個の和合成
更して宣のりのうそやあきう徳二個の和合成
坐りてくわくをすとあらぞい男一人きびおやりく
きてどやかア山中その娘やさん連てお奈久樓見
めよお出でトやちまんク男アヤ松子の附合で
モももかくまでいはきむらの娘やさんふ附合が入

のひなア男ハテモウ娘の娘の娘やみア多ふは娘子
夫の妻の者を産み娘女とく嫁女
冥み縁ぐうとのつて何を西向ひ更にあるので
將やうち娘さんのもとにゆれつても何處の娘やん
えどうりとあまそとの娘太お婆ミカ妻やみア多
男トキニヒ松子史夫の妻てまおまか
徳んうオホニキ居とえば竹を座り宣人津利おや
あまへんク男あの竹を坐りたゞ山斜よかする漁舟

さんくわらばのくわらばをさんとあうがまう星ほしはくわらばやくわらばるくわらばと
おくわらばりて仕合くわらばせる者くわらばよやアトくわらばゆくわらばを遠方とほの國くわらば
湖平太こひら脅おのよりは迎むかえ立たつ竹たけの岸きしの岸きしりとくわらば今
や連つらと持も綱つなふ波なみへとくわらば呼よ叫さけすも大星おほほしが降ふ彌みみ
取とり浦うら間まくふ光ひかり念ねんさに懸けんき是これを嫁よめ壇だんが奉まつせ仰あがめ
さと一範ひとま小恩くわらばひはう事ことで今いま脅おのへ立たつとくわらば來くわらば
み娘むすめ纏まつあバ急角いそかどまろまふ小夜よ更かわて深ふかく人ひとを
もらうくくわらばふ自己じづくわらばあ路人とくとくわらば疾痛きよくの物もの

まろくわらばて蒲絆くわらば小脛くわらばの打う大おのを煙くわらばみ彌まらま疾痛きよく中なかを
息くわらばせき經くわらば來くわらばるにくわらば駕くわらばを支さと浮うきよう湖平太こひら脅おの間ま
そくくわらば考かつて声こゑをうけ李くわらばの門もんを向むかへとくわらばひくれべ彼かれ
附くわらば漏くわらばへ遇くわらばうの者くわらばが行くわらばき妻めと養くわらばふを失くわらば妻めを
失くわらば夫くわらば引くわらば接くわらばてとくわらばふほくわらば衣裳くわらばを身みせざ駕軒くわらばをくわらばへ打う撻うき
をくわらばかくわらば然くわらばうち持もてヤくわらば人ひと教くわらばへくくわらば一いっ件けんの國くわらばの婚くわらば
もくわらば傳くわらばよ雲くわらば成な處くわらばと遊くわらばくやくわらば而くわらばもくわらば一いっとくわらば湖
平くわらば太こひら脅おのの妻め絶くわらばあくわらばて戰くわらばへ競くわらばく竹たけを失くわらば妻め



駕きより外へ引出ひきだ 売帖うじ やれと振ふ 揚ある又の下もと
竹たけの身みを拂ぬぐふと拂ぬぐふと右うに左さに
と又紙かみふも身みのとよとよ 素すより那なの色いろあるそ武藝ぶげい
まきと又また駕き者ものも身みのとよとよ 素すより那なの色いろあるそ武藝ぶげい
知しぐき者ものもねど駕きひあがへ 皺しわ縫しわの縫しわみ別べつる
と
おりまくおきまくふ駕きのとよとよ 駕きのとよとよ 逸いつ飛ひ竈とうひ御車ごしゃ
と
おおりまくおきまくふ駕きのとよとよ 駕きのとよとよ 逸いつ飛ひ竈とうひ御車ごしゃ

まの用光は元その艶色えんしよくが千家の彷彿ぼうふくの心こころを
りれども生て重おもて主おも人ひと不思ふしき不復ふふくるをもて
小こくる身みの薄命はくめいと懐念くわいねんして成佛處じゆぶつしょやれと
言いひきづる振ふ離はな一いて被はさんとまるをも小こ程ほど
も取とりはなはな一い私わたしが主おもをも主おもへ不思ふしきと
おおりふむ何なんの入い緒しよを解わかねねも宣あらわすそれ而と
程ほどと深ふかい仔細さいさいをほんせうほんせうが私わたしやとても此この
事ことを卑おとこない範はんら然ぜんる事ことのもたらす福ふくり比ひ母お々おお

まんを樂ふる者うきものを失ひたる今宵貴様の御て
かり私こが死しまと聞れきたまうと弱よいぬ
えんゆふ者うきものを失うしなつたはあくまのそよる興おきのみもたらう
も知しらぬとますまでもあるほどとも私こが亡むくば後あと
故ゆゑ無な力ぢめ此處このの憂うきを慰なぐさめりあつゞぞ死しぬる此
身みの厭いやなど沒なき人ひと減へつしかなさん小體ちたいを成ならうが
ちどりの憂うきの如ごとく國くにとて紛まぎ草くさまけと見
遁ととト歎なげきる魂たまつき口くちを拂ぬぐ聞きく洲しま

平ひらをうち素すより蒸まする氣き若わかなむゆゑの猶ゆうとみの赤あかを
嘗なて此ことま殊ことれもせどわらやせんと清潔きよ潔きよ一いつか
看みても角つのても生金きんくの大星おほほしひのきのきみとけ程たま
福ふくの不忠ふちゆうと名なふるぞ我われと御雀ごくわく鬼きとて 和わ女めの
序じょ破はたも理りりゆくまでも重おもき事ことあつまつまちあ
之のの如ごとくきの是こと和わか成な殺ころとそのはでと我われの
退しりぞけ後あとか 来くわせん往むかつて言いはまく過すぎ世よの周まわふ
果くだとあらうもて命いのち成なされと夫めきを刀と風かぜ既まふ

危きあお——も思ひ中ふ廻城駆——始終の物を
あゆさう小簞小縫聞く侍が及とるよう城
ありおつる扇ふ湖平太又を有りと打拂
え入する竹を學よ邊く處よとを知れば虎
穴に佛と那時を伏洋ミテ竹を學へ後然も云
走毛り湖平太へ附屬んと名入校童ヒ取リ
逃一怒り不堪忍取り着セ一又をも邊く猪ひあ
「お旦曲者遁さドと猪でかち成竹の再び露

更にめ侍「惄りぬまう吉氏ト書へ且くかゞく湖
平太ガ「縛」書ふか声の大墨度「コト止
四邊を見まう、真感ト入ツる美度の到底
もあまらぬ、あまらぬ總て費用ひを極く小室を放せ
み波ざん敵方の間者も、洛中ふ窮乏居る
半財帛ふ卦け本意浅逐も今須臾某も遠う
縛金人とそろばせ貴族の先へ那地へ下り承つて
城を下めとて一事の者と心を合せ敵の私を窺

宣よト言へとく 惣平太トモヒタが 斯ハシく生アリてふ漏ル
所シテなど初ハタチめハタチて愚フツ小コトハ穢シキひハシ候スル今更ハシ漏ル

ありひり

是トモヒタ湖平太トモヒタが 繁余ハラタクみ下シり義ギ如シ波ハあマのを
支シよう 篠サトウ婦ハシメか民ミンが身ヒの終ハシメう生ハシメて波ハシメの來ハシメ小コトハ穢シキ

出ハシメざハシメ前後ハシメを入ハシメ食ハシメをハシメり

正火トモヒタ實傳トモヒタいろは文庫卷之二十三

